



菊地靖彦著

伊勢物語・大和物語論攷

鼎書房

菊地 靖彦 (きくち やすひこ)

1936年生。山形県出身。

東北大学文学部国文学科卒業。

東北大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了。

東北学院高等学校教諭・国立一関工業高等専門学校教授を経て、  
山形県立米沢女子短期大学教授（国語国文学科長）。

文学博士（東北大学）。

専攻は中古文学（特に和歌・歌物語・日記文学）。

【主な著書】

『『古今集』以後における貫之』（桜楓社・1980）

『古今の世界の研究』（笠間書院・1980）

『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』（共著・小学館・1995）

『和歌文学大系19 貫之集 躬恒集 友則集 忠岑集』（共著・明治書院・1997）

---

## 伊勢物語・大和物語 論攷

---

2000年9月30日 初版発行

著 者 菊地 靖彦

発行者 加曾利達孝

発行所 鼎 書 房

〒132-0031 東京都江戸川区松島2-17-2

TEL・FAX 03-3654-1064

---

印刷：㈱太平印刷社

製本：㈱エ イ ワ

---

ISBN4-907846-01-0 C3091

## 第一部 伊勢物語

|                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| 第一章 伊勢物語私論——主として伝承と反古今との視点から——  | 三   |
| 第二章 「むかし、をとこ」論                  | 二七  |
| 第三章 二条后物語論                      | 五一  |
| 第四章 東国物語論                       | 六九  |
| 第五章 帰京した「をとこ」——第一六段から第二四段までの論—— | 八七  |
| 第六章 たゆたう「をとこ」——第二五段から第三七段までの論—— | 一〇五 |
| 第七章 第六五段と第六九段をめぐる               | 一二七 |
| 第八章 後半部の「をとこ」をめぐる               | 一三九 |
| 第九章 『伊勢物語』のめざすもの                | 一七三 |
| 付章一 伊勢物語の増益                     | 二〇五 |
| 付章二 (書評) 福井貞助『歌物語の研究』           | 二二一 |

## 第二部 大和物語

|      |                               |      |
|------|-------------------------------|------|
| 第一章  | 在中將章段をめぐって——『伊勢物語』と『大和物語』——   | 三二   |
| 第二章  | 「大和」ということをめぐって——第一四九段を発端に——   | 二四七  |
| 第三章  | 『後撰集』歌章段をめぐって                 | 二六三  |
| 第四章  | 〈歌を詠むこと〉をめぐって——『大和物語』第一部の主題—— | 三二七  |
| あとがき |                               | 三三   |
| 章段索引 |                               | 左(1) |

第一部 伊勢物語



## 第一章 伊勢物語私論

——主として伝承と反古今との視点から——

一

(題しらず)

読人しらず

かすが野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり (『古今集』春上)

(題しらず)

読人しらず

さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖の香ぞする (『古今集』夏)

たとえばこうした『古今集』四季部の歌は、それぞれにその詠まれた実際の場があったはずである。だがそれは捨象されて「題しらず」とされる。ということは、これらの歌が春なり夏なりといった季節を詠んだ歌として始めて『古今集』歌たり得たということである。

『古今集』では、その歌を通して表白されようとした感情を一応度外視し、表現そのものの価値をまず重んじた。機知的、理知的といった古今風の一面がそこに出る。『古今集』の四季部というものからして、それは自然を知的に裁断し、編者の論理によって構成されたものにはかならない。そしてこうしたことは、自然発生的な歌



が漢詩とならぶ「和歌」とされ、自覺的な文芸としての自律性を獲得するためには、一度は通らねばならなかった必然の過程であつたといえるであらう。「古今集」が抒情の断絶であるとはよくいわれるところだが、決してゆえのないことではない。

だがそれは古今「集」の中における歌についていえることであつて、個々の歌そのものがすべて抒情を喪失していたということではない。殊に『古今集』以前の時期に詠じられた歌（主として読人しらすの歌）はそうである。たとえばここに引いた二首の歌も、「集」を離れてみればもともと生活の中から詠み出された抒情であり、その抒情の背景として季節感があつたに違いない。具体的にいえば、これらの歌はいずれも恋愛の場で詠まれたものであらう。しかし『古今集』はこれらの歌をそれぞれの季節の表現としてしかみないのである。すなわち『古今集』以前の歌からみれば、『古今集』の営為とは歌が詠み出される実際の基盤から歌を引き離すことであつた。

さて、『伊勢物語』はこれらの歌を**第二段、第六〇段**の話の中で扱っている。前者は初句を「武藏野は」と改められて入る。武藏野の中に男に隠された女が、野に火をかけられそうになってこの歌を詠じたという話であり、後者はかつて男の許を去った女が或る国の祇承の妻となつてゐるのに再会した男が詠みかけた歌とする。こうした『伊勢物語』のこれらの歌の扱い方は明らかに『古今集』の行き方とはまったく相反するものでしかない。もっとも、『伊勢物語』の語るところがこれらの歌のそもそも詠まれた事情を真実伝えているとは思えない。「春日野は……」の歌はおそらく農民の野焼きの行事にまつわる民謡だったろうといわれているのに、『伊勢物語』第一二段の話はそれとは違うし、第六〇段は、「この歌は本来花橘の木蔭かなにかで作られたものであらうのに、この物語では橘の実を手にとって詠んだことになつていて、明らかに作意に破綻を来た<sup>(1)</sup>している。」と野口元大氏がいわれるように、話と歌との間にしっくりしないものがあるからである。ということは、『伊勢物語』にし

ても、なにもこれらの歌にまつわる事実を記そうとしているのではなくて、歌をそういう状況の中に置いてみようとすること自体にねらいがあることを意味する。つまり、歌を鑑賞享受するもう一つ別のあり方を意図的に提示しているのである。この両段では季節感などはほとんど問題にもならない。そして歌はどうしようもない人間関係の中に生まれ、悲喜劇をかたち造っていく契機として扱われているのを見る。第一二段の女は歌を詠んで捕らえられたし、第六〇段の歌は女を出家させることになった。歌をそれとしてひとりあるのではなくて散文的な状況の中に離れがたく結びついたものとして認識する立場が主張されているのである。

このように、対極に『古今集』を置いてみると、『伊勢物語』が歌というものをめぐって反『古今集』的な立場に立つものであることは否定できないところである。『古今集』と『伊勢物語』との異質さは『古今集』業平歌を核にすえた、たとえば有名な『伊勢物語』第九段をみてもよくわかる。このことについては室伏信助氏、阪下圭八氏に精細な考察がある。<sup>(2)</sup>「かきつばた」の五文字を句の頭にすえて詠む「から衣きつつなれにし……」の歌が『古今集』ではその折句の機知が重視されるのに対し、『伊勢物語』ではもっぱらその抒情を尊しとする様相は明らかだし、「名にしおはば……」という言問いの歌も、『古今集』でこそ名を負うものに對する機知であるが、『伊勢物語』ではしみじみとした真実の問い掛けとしてとらえられる。だからこそこれらの歌が、「皆人、乾飯のうへに涙落してほとびにけり」、「とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。」といわれるような、周囲の共感と感動を得られるのである。それはまったく歌の技巧的な表現に對する讃嘆などではなくて、歌が表白する心情に對する共感である。阪下氏がいわれるように、まさに「歌は歌物語の中へ位置づけられることで、その機知や技巧や見立てといった外皮が洗いおとされ、自然で素朴な情緒が回復される。」<sup>(3)</sup>という様相を、この段は示している。

そもそも『伊勢物語』に入る『古今集』歌は、『古今集』の側からみれば反逆でしかない。『伊勢物語』中の『古今集』歌は、数え方にもよるがおよそ五八首（天福本二二五章段の限りで）、そのうちの四一首は恋と雑の歌で、『古今集』の中心である四季部に入る歌はわずか八首である。しかもそのうち五首は業平の歌だから『伊勢物語』にあるのである。また作者別にみると、五八首から業平歌三〇首を除いた二八首は、ほとんどが読人しらずの歌であって、古今風の中心たる撰者時代の歌などはもちろん含まない。『伊勢物語』は古今風の四季部に入るような歌はほとんど無視し、読人しらずと業平の歌にもつばら集中する。

『古今集』と『伊勢物語』との成立の先後関係を確定することは至難である。『古今集』の業平歌をみれば『古今集』以前に『伊勢物語』（らしきもの）が存在したらしいことは否定できないし、一方『伊勢物語』には「古今集」から入ったとみるよりほかない例もある。後述するように、『伊勢物語』の最終段階は業平らしき「を」と「わ」像が形造られた時であると考えられ、その時点でいまだ『伊勢物語』に入っていない『古今集』業平歌が、いわば残務整理のかたちで『伊勢物語』に入ったと思う。その時期は、だから、『古今集』成立時を遠く隔たるはずはない。業平自身が『伊勢物語』の生成にかかわっていなかったらとすると、彼が没した八八〇年から『古今集』成立の九〇五年以後、それをあまり隔たることのないある時までの間に、『伊勢物語』はそのほとんどの姿を整えたはずだと思う。古今風と『伊勢物語』との形成は、だから巨視的にみればほとんど同時期であるといつてよい。そして同じ時期にこのように、歌についての対照的なふたつの見方があったことに、あらためて注目したいのである。

和歌史の上でこの時期を見ると、いうまでもなく古今風が急速に形成されていった時である。業平にもすでに

屏風歌が残っているが、屏風歌や歌合が盛行しはじめるのは八八〇年を隔たるほんのわずか後であり、八八七年には宇多朝が始まり、全体として『古今集』前夜というべき時期である。そして古今風の形成を推し進めたのは強引ともいえるほど明快にして合理的な精神であり、政治と結託した力でさえあった。『古今集』の成立は朝廷の権威とそれに結びついた藤原氏の権力とを背景にし、勅撰というかたちで相当急激になされている。中西進氏は「少なくとも和歌の本質に関する限り、古今集の理知は十世紀の和歌が、そのものの自体の進展の歴史の中に獲得したものではなかった。」<sup>(4)</sup>といわれる。だから文芸プロパーの次元では相当の困惑と混乱が潜在したに違いない。『伊勢物語』はそうした時期に生まれた。それはすなわち急速に形成され行く古今風に対する反措定として、やはりとらえられるべきものであろう。

『伊勢物語』を単に「をとこ」の物語とみることは安直にすぎるであろう。『伊勢物語』は本来歌をめぐる物語であり、その原点はあくまで歌であったはずである。『伊勢物語』がそもそも追い求めたものは、歌というものが人間の生き方といかに濃密に関わるものかということであつたらしい。端的な例を、あまり触れられることもない第二段にとつてみよう。

むかし、はかなくて絶えにけるなか、なほや忘れざりけむ、女のもとより、

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ恋しき

といへりければ、「さればよ」といひて、をとこ、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ

といひけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきのことどもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらむ

返し、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむ

いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

「はかなくて絶えにけるなか」という。だがなぜ夫婦別れをしたのか、物語はそのようなことにはまったく立ち入ろうとはしない。それはおよそ歌物語の範囲外である。この章段の問題は、歌というものがあることよって二人の関係が復活し得、さらに「秋の夜の……」の詠み交わしによって二人の関係はかつて以上に確かなものとなる、ということにはほかならない。これらの歌そのものはそれ程すぐれたものともいえないであろう。それも歌物語がかくべつ要求したことではなかったようである。しかしもしこれらの歌が『古今集』の撰歌範囲に入り、仮に撰入されたとしても「いにしへよりもあはれにてなむ通ひける」という、この章段のもっとも大切なテーマは、『古今集』ではついに顧みられることはなかったはずである。『伊勢物語』の存在意義はそこにあった。なお、「秋の夜の千夜を一夜になずらへて……」の歌は、おそらく民謡に発しているだろうことが福田良輔氏によって指摘されている。<sup>(5)</sup>

## 二

『伊勢物語』は業平歌の物語化からその生成が始まったようにいわれている。だがそうした見方にはかなりの疑問がある。『古今集』業平歌を核とする章段はわずかに二六章段にすぎない。そのほかにも今では確認しきれな

いが、事実業平の歌を核とする章段もかなりあるだろう。だがそれにしても業平歌章段の『伊勢物語』一二五章段中に占める割合はそんなに大きなものであるとは考えられない。一方には明らかに業平作ではないことが確認できる歌、たとえば『古今集』読人しらずの歌、伊香子淳行、紀茂行などの歌も入っている。そしてそれらも又、業平歌がそうであると同じく「をとこ」「人」などが詠んだことになっている。『古今集』業平歌以外の業平歌が確かめられないと同じに、業平ならぬ人物の歌も確かめられないだけのことで、事実はかなりあるのであろう。当然のこととはいえ、「をとこ」はけっして業平の別称ではないし、『伊勢物語』は業平を特別扱いしているわけではない。かえって業平はとりたてて抜き出せないほどまでに「をとこ」の中に解消されていると見る方が正しい。

もし『伊勢物語』が業平歌の物語から始発したのだとすれば、明らかに業平歌でない歌をめぐる物語はすべてそれ以後に付加されていったとみるよりほかない。そしてその量は本体をはるかに超える。そのこと自体不自然きわまるのだが、それはそれとして、その付加される理由がはつきりすればよい。なるほど業平像が成長し、いろいろの方面に増殖していった結果であろうとは一応考え得る。たしかにそう考えてよい章段はかなりあることは事実である。しかしながら、たとえば伝誦歌や民謡系統の歌にまつわる話で、およそ業平とは何の関係もないと見られる章段などは、どうして付加され得るのだろうか。たとえば、有名な筒井筒の**第二三段**などが、業平像が形成された後に付加されねばならぬ理由がすっかり解き明かされているとは思えない。

『伊勢物語』が業平歌章段から生成を始めたとして、業平を「をとこ」とすることが主として業平を臚化するためであつたとするなら、それは少し無理である。なぜなら、その場合歌の作者が業平であることはすでに知れ渡つたことであつたはずで、臚化の意味はあまりないと思われるからである。業平の物語を語り伝えようとする

ことが『伊勢物語』のそもその意図であつたのなら、主人公はなにも「をとこ」でなくとも「業平」そのままでもいいにかまわないであろう。その例が『大和物語』である。「業平」としても相当の虚構は許されてよいはずである。ならば「をとこ」とは實在の業平を拡張し、業平ならぬ人物の事績までをも含めてしまったための手法であつたのか。たしかに結果的にはそうした効果があつた。殊に「をとこ」を「むかし」に設定して、「むかし、をとこ」と語り出すことは、事實を脱離して業平物語の幅を大きく拡げたといえる。そして『伊勢物語』がすぐれた作品となり得たのも、たしかに主人公を「をとこ」としたことに発していることは間違いない。しかしながら、「をとこ」なるものが、物語のもつとも効果的な手法として計算し尽くされた上で創出されたものといいきれるであろうか。そしてもしそうであつたのなら、この方法は以後正当に引き継がれていてもよかつたはずである。しかしその意味からすると『大和物語』は退行としかいいようがないし、『平仲物語』はただ形式的に「をとこ」を使っているにすぎず、到底『伊勢物語』の上に立つてその効果を計算していたようには思われない。

次に、『伊勢物語』の諸段の中において業平歌章段のいくつかはその他の章段よりは内容、構成ともによほど発達した性格のものであることに注目したいのである。中には、歌をめぐる物語というよりは、むしろ物語の方が先行して歌はただ単にその中に取り込まれ、利用されているにすぎない章段がある。業平歌章段のいくつかは、散文的要素を極度に抑制して中心を歌にかける歌物語という段階を超えて、歌を含んだ物語というところまで達している。たとえば伊勢齋宮物語の第六九段は、もはや「単に歌の表現効果に依存するかたちで成り立つ歌物語とは違って、物語に登場する人間の行為が、一つの主題を形造っていく虚構作品であり、歌はその主題を主情的に奏でるものとして位置づけられている、ということができる。」とは室伏氏のいわれるところである。<sup>(6)</sup>そして

又、第六五段は『伊勢物語』中最大の章段であるのだが、これは内容的に業平歌章段のまとめといえ、明らかに業平らしき「をとこ」の物語ではない。業平らしき「をとこ」を描くためにこの段は構想され、そのためには業平歌以外の歌までが利用される。「単に歌の表現効果に依存するかたちで成立つ歌物語」が、逆にこうしたところから引き続いてくるとは到底考えられない。おそらくはこのあたりが、歌物語が到達した最終段階であつたといふべきであらう。

業平歌章段以外の章段の中にはたしかに業平らしき「をとこ」像の形成後に付加されたものはあつたであらう。だが逆の見方をすればそれらの多くは業平歌章段のかえつて前の段階にあつて、業平歌章段に影響を与えたものもあつたのではないか。すべてが付加とばかりはいえないであらう。

ところで『伊勢物語』中の歌の中には、民間伝誦や民謡の系統の歌がかなり多いことが指摘されている。『伊勢物語』中の『万葉集』（類）歌は『万葉集』の中でも殊に民謡的なものが多く、『古今集』歌も業平のものを除けばほとんどが読人しらず歌である。『伊勢物語』は、実はこれらの歌を含んで民間伝承をふりかえるところから始発したのではなかつたらうか。『伊勢物語』の中の、具体的にどの章段が伝承にもとづいているかを見定めることはかなり難しいし、又必ずしも伝承をそのままに採録したといったものでもなかつたであらう。けれども、業平とはおよそ無関係とみられ。あまり顧みられもしないような諸章段の方に、かえつて『伊勢物語』の始発があつたように思われるのである。

そしてその時、物語が語り進められるうゑで主人公となるのが、どこの誰とも定め切れない、文字通りの「むかし、をとこ」である。伝承はそうして語り出すほかにない。勿論「をとこ」があるなら「をんな」を主人公と



する話があつてもよいはずで、事実、『伊勢物語』の中には歌の詠み手が女でしかない章段もいくつかある。それらはたまたま紛れ込んだなどといったものではなくて、かえつて『伊勢物語』の原初の姿をうかがわせるものなのである。『伊勢物語』の「むかし、をとこ」とは、そのように、歌にまつわる話を語り出すに必要なパターンとして伝承の中からきわめて自然に得てきたものだったというべきであらう。

そして、その「をとこ」に業平は重ねられたのである。そうでなければ業平は、ともかく「をとこ」とはなり得ても「むかし、をとこ」となるのは容易でなかったはずである。そしていったん「むかし、をとこ」に重ねられた業平は、たちまち伝承の「をとこ」を乗っ取つてしまい、急速に業平らしき「をとこ」像が成長したのである。業平があつて『伊勢物語』があつたのではなく、『伊勢物語』が業平を発見し、育てていたのである。そもそも歌物語は容易に物語そのものへ転化してしまう微妙さをそれ自体のうちにもっている。歌物語の中の「をとこ」が、どこの誰とも容易に推測しようのない、民間伝承中の「をとこ」である限りは、「をとこ」はそれ以上生長するはずはない。けれども、たまたま業平の歌にまつわる話があつて、業平が「をとこ」といわれてしまえば、もはや「をとこ」は業平以外の誰でもなくなる。そうするとその次には、歌よりも業平らしき「をとこ」を先立てた語りが出てくることは必然である。歌はその物語の中に適当にはめこまれて行きさえすればよい。歌物語ならぬ「をとこ」物語の誕生である。歌物語は業平と出会つたときに、その微妙なバランスをくずし、（歌を含んだ）物語にまで発達して、そこで終焉する。

『古今集』業平歌章段の中には、どうしても『古今集』から入つたとしか考えられないものもある。それらは『伊勢物語』が業平らしき「をとこ」像の造形に焦点を絞つたとき、業平歌は能う限り全部物語化しようとして、いわば残務整理のかたちで入つたのではないかと思う。およそそのあたりで『伊勢物語』は一応終結する。増補